

るが、上記については現地での調査が最も肝要なことのようである。

なお、本小文中に使用した插図の作成には工藤修一氏のご協力を得た。記して感謝申し上げたい。

(浦幌町郷土史研究会員)

註 チップラーに入ったトロッコは、連結器を受けるとめる金具によって固定され、トロッコは線路から離線することはない。チップラーは廻転部に取り付けられたレバーにより自動的に圧転・停止逆転を行なう。巻き揚げ機は山頂の1基だけではなく、幾方向にも掘られた坑道の各分岐点に各々設置されており、深部からトロッコを各分岐点を何度も経て坑出口に至る。坑内用トロッコは全て鉄板製の炭車で、長さ160cm～170cm、幅110

cm余り、積載容量700kg程度である。

引　用　文　獻

- 赤井哲朗 (1968) 『明治の機関車コレクション』 東京
- 臼井茂信 (1969) 『日本蒸気汽閥車形式図集成』 2 東京
- 小熊米雄 (1977) 「尺別鉄道」『私鉄車輛めぐり特輯』Ⅱ 東京
- 寺島敏治 (1974) 「各炭鉱の採炭」『鉄路炭田――資源とヤマの盛衰――』釧路
- Newton K. Gregg (1976) "TRAIN SHED CYCLOPE DIA" No.44 Navato California
- 和久田康雄 (1968) 『新版資料・日本の私鉄』 東京

浦幌町の蜻蛉目(トンボ)分布について

松　本　尚　志

▼はじめに

物心つき始めた男の子にとって、トンボは格好の遊び相手であった。私達が子供の頃には、札幌の街の中でも、空をすいすいと横切る赤トンボを見ることは稀ではなかった。同居していた従兄が同じ中学校の上級生で、その頃では珍しい昆虫箱にきれいに並べていたトンボに目を輝かしたことを見出だす。その従兄も予科練に入隊し今は亡いが、札幌の街角にトンボを見ることもなくなったであろう。浦幌に住んで6年になり、その間に採集した標本もある程度になった。私の転勤もあって浦幌のトンボについてまとめるにいたが、私自身の不勉強と経験の不足から同定できないでいる標本もかなりある。しかし、浦幌町のトンボについての文献は全くないので、あえてまとめるにいた。したがって、今後多くの人々のご批判を頂いて、補っていきたい。

資料としては、私の標本及び記録・採集・観察日誌、それに加えて浦幌町森林公園の家所蔵の標本を使用した。

I

浦幌町で確実に生息する種は23種であるが、私

の能力不足から、イトトンボ科のほとんどを同定できず保存されたままで、その上釧路地方では46種が記録されていることとあわせて考えると、私の確認を大きく上まわることは疑いない。末尾に音更(国見山)の分布とともに釧路地方の分布一覧表を付したのは、今後の調査研究に役立てたいという意味である。参考にしてほしい。

II

浦幌町で採集、確認した種を記載するが、和名および採集日時、場所の順にする。私以外の採集した記録は採集者名を付してある。若干の説明を付した種もある。

イトトンボ科

1、エゾイトトンボ

1977. 7. 29. 東山 採集者：西島
湿原・湖沼近くに生息する。

アオイトトンボ科

1、オツネントンボ

1977. 11. 27. 万年 成体で冬を越す。この個体も住宅内で採集した。

2、アオイトトンボ

1975. 7. 30、9. 2、9. 4、 万年湿地の小沼で

採集した。多産する。

3、エゾアオイトンボ

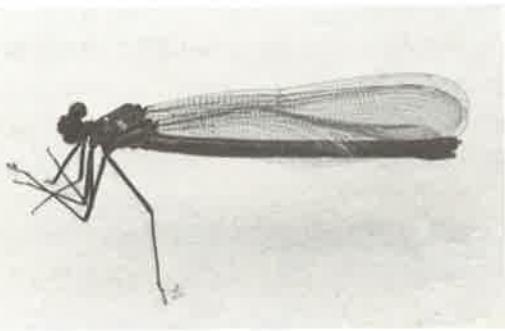
1977. 7. 29. 東山 採集者：倉持・西
北海道北部・東部の低地湿原に多い。

カワトンボ科

1、カワトンボ

1975. 5. 29. 万年

山地・平地の渓流近くに生息する。翅の色に変異が多く、北海道には透明型のオス・メスと不透明斑を伴った橙色オスとが混生する。この個体は透明型であった。



サナエトンボ科

1、ホンサナエ

1975. 6. 14. 万年裏山

平地・山地の渓流近くに生息する。翅胸の前の黄色の筋が乙字状で太い。

2、コサナエ

1977. 7. 29. 東山 採集者：原内

山地・平地の池沼に春早くから出現する。小型。

3、モイワサナエ

1975. 6. 14. 万年裏山

1977. 7. 27. オベトン川

渓流を好む。やや小型で胸側の黒い筋が太い。

ヤンマ科

1、オオルリボシヤンマ

1975. 9. 2. 万年湿地



大型かつ深みのある水域を好む。体色も青味が強く縄張り活動が強く見られる。

2、ギンヤンマ

1975. 9. 10. 万年湿地

万年湿地の小沼で採集したが逃げられる。美しい大型のヤンマ。北海道北部では記録がない。浦幌でも少ない。

オニヤンマ科

1、オニヤンマ

1978. 5. 9. 北町

わが国に生息するトンボの中では最も大型である。北海道産はやや小型、道路上や渓流上を高く往復する。とまる時翅を水平にしてぶら下がるようにする。

エゾトンボ科

1、エゾトンボ

1977. 7. 29. 東山 採集者：西島・原内
全身が金緑色の中型のトンボ。未熟なトンボでは、胸側に2本の黄色い筋がある。湿原を好み、釧路湿原などに多産する。

2、キバネモリトンボ

1975. 8. 19. 万年 1975. 9. 8. 万年浦中グランド

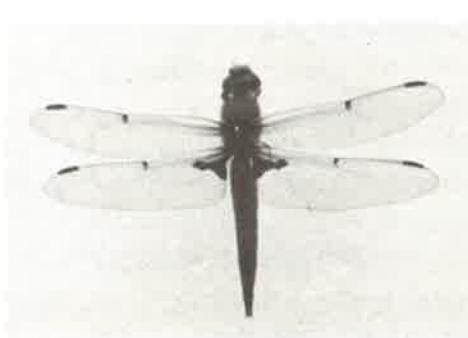
前翅の基部が黄色。浦幌では比較的多く、どういう訳か校舎内に飛び込んで来ることが多い。

トンボ科

1、シオカラトンボ

1976. 7. 3. 万年 1977. 7. 2. 3. 東山
日本各地に普通。雌雄異型で成熟して翅胸及び腹部の背面に白粉を生じたオスをシオカラトンボというが、メス及び未熟なオスは、ムギワラトンボと呼ばれている。

2、ヨツボシトンボ



1975. 6. 11. 万年裏山

体の幅が広く翅の結節部に黒班があり、後翅の基部にはほぼ直角三角形をした黒褐色班のあるのが特徴である。

3、エゾアカネ

1977. 7. 29. 東山 採集者：西島
北海道北部にのみ生息する。

4、ミヤマアカゲ



1975. 8. 21. 東山

低山地や丘陵地の付近に多産する普通種。前後翅ともに縁紋の内側に幅広い赤褐色の帶があるので、他の赤トンボの仲間とはすぐ区別できる。

5、ムツアカネ

1977. 8. 25. 万年浦中グランド

他の赤トンボの仲間のように未熟なときは腹部が黄色みをおびるが成熟すると黒くなる。

6、アキアカネ

1977. 7. 29. 東山 採集者：原内
普通の赤トンボ。下口唇の中片が黒い。成熟したオスは赤くなるが腹部が特に激しい。夏山地に生息し、大群を作つて平地に移動していく。

7、ナツアカネ

1976. 8. 22. 万年

各地に普通に生息する。オスは成熟すると翅胸から複眼まで赤くなる。

8、マユタテアカネ

1975. 9. 4. 万年湿地

オスの前額の前面に対になつたまゆ状の黒い紋がある。

9、ノシメトンボ

1977. 9. 30. 東山

赤トンボとしては最も大型、前後翅共に端に

黒褐色部があつて区別できる。

10、キトンボ

1975. 9. 2. 東山

1975. 9. 4. 万年湿地

1976. 8. 15. 住吉

からだはやや幅広く前後翅共に基部から黄色で全長の $\frac{2}{3}$ 以上になる。

(採集者名を記したものは、浦幌町森林公園の家標本である。)

III 釧路地方・音更国見山・分布比較表

種名	浦幌	音更	釧路
イトトンボ科			
1. カラカネイトトンボ			○
2. アジアイトンボ			○
3. クロイトトンボ			○
4. セスジイトトンボ			○
5. エゾイトトンボ	○	○	○
6. キタイトトンボ			○
7. エゾルリイトトンボ			○
8. ゴトウアカメイトトンボ			○
アオイトトンボ科			
1. オツネントンボ	○	○	○
2. アオイトトンボ	○		○
3. エゾアオイトトンボ	○	○	○
カワトンボ科			
1. カワトンボ	○	○	○
サナエトンボ科			
1. ホンサナエ	○	○	○
2. コサナエ	○		○
3. モイワサナエ	○		○
4. コオニヤンマ			○
ヤンマ科			
1. オオルリボシヤンマ	○	○	○
2. ルリボシヤンマ			○
3. イイジマルリボシヤンマ			○
4. ギンヤンマ	○		○
オニヤンマ科			
1. オニヤンマ	○		○
エゾトンボ科			
1. オオトラフトンボ			○
2. カラカネトンボ			○

種名	浦幌	音更	釧路
3. ホソミモリトンボ			○
4. コエゾトンボ		○	○
5. エゾトンボ	○		○
6. キバネモリトンボ	○	○	○
7. タカネトンボ			○
トンボ科			
1. シオカラトンボ	○		○
2. シオヤトンボ			○
3. オオシオカラトンボ		○	
4. ヨツボシトンボ	○	○	○
5. タイリクアカネ			○
6. エゾアカネ	○	○	○
7. ミヤマアカネ	○		○
8. ムツアカネ	○		○
9. ナツアカネ	○		○
10. アキアカネ	○	○	○
11. ヒメアカネ			○
12. マユタテアカネ	○		○
12. ヒメリスアカネ			○
14. コノシメトンボ			○

種名	浦幌	音更	釧路
15. ノシメトンボ	○	○	○
16. キトンボ	○		○
17. カオジロトンボ			○
18. エゾカオジロトンボ			○
19. ウスパキトンボ			○
計	23	13	46

(釧路地方については、釧路叢書第18巻 釧路湿原、釧路湿原総合調査団 S 52. 7. 30 釧路市 209頁以下より、音更国見山については、国見山自然観察教育林の環境、帯広営林局 1976. 107~108頁より作成)

参考文献

- ①原色昆虫大図鑑 III 安松京三、朝比奈正二郎 石原保、S 40. 5. 30 北隆館
- ②標準原色図鑑全集 2 昆虫 中根猛彦、青木淳一、石川良輔 S 41. 5. 1 保育社
- ③カラー日本のトンボ 浜田康、石田昇三 S 48. 7. 1 山と渓谷社
- ④アニマ '77. 7月号 トンボの世界 平凡社

モコト式土器の新資料

—— 浦幌町平和遺跡出土の縄文中期の土器 ——

後藤秀彦

I、はじめに

ここに紹介する資料は、1967年及び1970年に発掘調査の実施された北海道十勝郡浦幌町字平和85番地所在の平和遺跡（大場・明石、1968）（明石、1971）から出土したものである。資料裏面には、『SH-3北』とのみ記載されているが詳しい出土位置及び出土状況は不明である。また、『SH-3北』と記載されているところからみると、1967年の第1次発掘調査時に出土したものようである。これらの土器片については、報告書中には何らの記載も見られないが、該資料が最近注目されている縄文中期の北筒IV式土器群に先行すると思われるモコト式土器の一バリエーションをなすものと思われたのでここに報告する次第である。

II、土器の特徴

SH-3北とネーミングされた土器片のうち、一

群の土器と思われるものは、Fig. 1 に示したものがその全てである。この他に縄文早期の無文土器や北筒IV式土器が少量あるが図示はしていない。

図示した資料の共通する様相は概ね次のとおりである。

地文に斜行の縄文を施し、胎土に植物性纖維、円礫を含み、口縁下に垂下しあるいは囲繞する太い隆帯をもつ。隆帯上にも刺突が加えられ、更に口縁部付近にも右方向からの扁平ヘラ状の工具による刺突が幾段にも加えられる例がある。また、地文の縄文は例外なく口唇部及び器内面上方に施されている。器壁は11~12mmのものが多い。

1は口縁部の大形破片である。平縁であるが山形の突起をもち、山形突起の頂点部から垂下する幅12mm程の隆起帯が、下方では囲繞するであろう隆起帯と接続している。隆起帯上は指による刺突が加えられ、瓜痕も残っている。2は口縁部近く